

| | |
|--|---|
| 日英教育学会 JAPAN-UK EDUCATION FORUM NEWSLETTER No.36 2010/11/30 | 日英教育学会事務局 〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96 佛教大学教育学部 谷川研究室内 Tel. 075-491-2141(代) yoshi@bukkyo-u.ac.jp |
|--|---|

こあいさつ

日英教育学会・代表 上田 学(京都女子大学)

今年も慌しく過ぎていこうとしております。事務局長として八面六臂の活躍をされ、本学会の活動を文字通り中心になって担ってこられた大田さんが他界され、運営委員などの仕事の分担も大きく変わりました。そのため何かと不都合や不便をおかけしてまいりましたが、このようにニューズレターをお届けし、学会としての活動も何とか軌道にのせることができるようになったことを喜んでおります。

ニューズレターは会員の活動を紹介する記事とならんで、学会そのものの活動記録が中心となっております。今後ますます学会を活発にし、研究の水準をあげていくためには、会員各位のお力を借りなければなりません。ニューズレターの記事だけではなく、次年度の大会では数多くの会員から研究成果が発表されることを今から期待しております。

また学会の運営や各種の行事・企画などお気づきの点があろうかと思えます。どのようなことでも結構ですので、アイデアやご注意がございましたら、内容を問わず、事務局や運営委員までご連絡をいただきますようお願い申し上げます。

今後とも各位からのご支援をもとに学会運営にあたっていく所存です。よろしくようお願い申し上げます。

皆々様のご多幸とご活躍をお祈り申し上げます。

第20回年次大会について

以下の予定での開催が決定いたしました。

日程をご調整いただき、是非ともご参加ください。

開催日： 2011年9月3日(土)午後～9月4日(日)

場所 玉川大学

なお、プログラムについては現在検討中です。ご提案いただければ幸甚です。

また、自由研究発表もぜひともご計画ください。

日英教育学会 第19回年次大会報告

第19回研究大会・総会が下記のとおり開催されました。

日時 : 2010年7月31日13時～8月1日12時30分

場所 : 京都女子大学 J校舎5階

参加人数 : 会員22名、ゲスト2名(モーガン夫妻)、通訳1名

研究大会初日は、まず、ジョン・モーガン John Morgan 氏(英国中等学校校長会・会長、President 2009/2010 of Association of School and College Leaders)に「From “Education, Education, Education” to “Freedom, Fairness and Responsibility” – the rapidly changing scenario in English education following the general election」と題してご講演いただきました。その後、小松郁夫(玉川大学)会員の司会のもと、谷川至孝(佛光大学)会員及び館林保江(監査法人トーマツ)会員をコメンテーターに質疑応答、全体討論を行いました。詳細については、紀要14号をご覧ください。

二日目は次の2件の自由研究発表が行われ、モーガン夫妻(お連れ合いのスーザンさんは副校長)も交えて、活発な議論が展開されました。

森川由美(一橋大学大学院)「スコットランドにおける新カリキュラムの導入過程—期待と抵抗」
植田みどり(国立教育政策研究所)

「学校間連携による学校経営改革—Federationの取り組みを中心に」

また、8月1日に開かれました総会での報告及び決定事項については次のとおりです。

1. 報告事項

(1) 会員数 140名(2010年7月20日現在)

(2) 2009年度活動報告

①ニュースレターの発行 33号(2009年5月9日)、34号(2009年12月24日)

②運営委員会

・メール会議 (会員の入退会等)

・運営委員会会議 2009年12月26日 於)京都大学東京オフィス

議題 1) 運営委員会の体制について

2) 運営委員の辞職願について

3) 2010年度大会について

4) その他 学会ホームページについて、紀要バックナンバーについて

③紀要第14号について

④その他

2. 審議事項

以下のとおり承認されました。

(1) 運営委員会の体制について

| | | | |
|------|-------------------------|----------|---------------|
| 代表 | 上田学 (京都女子大学) | 副代表 | 小松郁夫 (玉川大学) |
| 事務局長 | 谷川至孝 (佛教大学) | 事務局補佐 | 青木研作 (西九州大学) |
| 紀要編集 | 広瀬裕子 (専修大学) | ホームページ担当 | 宮島健次 (西武文理大学) |
| 学会運営 | 沖清豪 (早稲田大学)、官腰英一 (東北大学) | | |

(2) 2009年度決算報告について (次ページ参照)

2009年度の予算は収入面で87万円余が計上されていましたが、決算では約37万円となっています。これは2009年12月以前の会費の支払いを証明する書類(振り込み通知書)がなく、会費の追加請求ができない状況にあったためです。

支出についても同様であり、支出を裏付ける領収書等が見つかりません。そのため、各費目に対応する決算報告が困難であり、銀行、郵便局に残されている現金をもとに、2009年度の支出額を推定しました。

以上の結果32万円弱の赤字決算を計上しました。

以上の提案に対し、総会では縷々ご意見をいただき、結論的には前事務局長の入金処理に基づき、未払い会費の請求を行うこととなりました。

(3) 2010年度予算案について (同上)

2009年度が赤字決算であることから、相当の緊縮予算を提案しました。なかでも、2011年度のゲスト招聘費をゼロとしました。

しかし、総会の議決に基づき未払い会費の請求を行うことになりましたので、その入金状況により、予算の改編もありうると考えています。

(4) 2010年度活動案

運営委員選挙 その他は例年どおり

以上が総会での決定事項ですが、あらためて以下の点につきご留意ください。

1. 会員数が昨年度より7名減となっています。他の学会等で院生や若手研究者に入会のお声かけを是非ともお願いします。
2. 財政状況が逼迫しています。未納会費の納入をお願いいたします。
3. 2010年度は運営委員の選挙の年です。奮ってご投票のほどお願いします。

2010年度運営委員会報告

2010年5月8日、新宿京王プラザにて行いました。今後の学会運営、事務体制、紀要の発行、2010年度大会等について話し合いました。なお、12月にも運営委員会開催の予定です。

◇2009年度 決算◇

| 一般会計 | | | |
|--------------------|---------|---------|--|
| ＜収入＞ | | | |
| | 予算 | 決算 | 備考 |
| 繰越金 | 56,436 | 56,436 | |
| 会費収入 | 692,000 | 144,000 | 6,000円×24名(～2009.12.20) |
| 当該年度 (会費増額分を含む) | | 157,000 | 6,000×21名+1,000×11名+5,000×4名(2009.12.21～2010.3.31) |
| 紀要会員 | 2,000 | 0 | |
| 過年度 | 120,000 | 15,000 | 5,000円×3名 |
| 計 | 870,436 | 372,436 | |
| ＜支出＞ | | | |
| | 予算 | 決算 | 差し引き |
| 会合費 | 30,000 | | |
| 人件費 | 70,000 | | |
| 消耗品代 | 10,000 | | |
| HP作業費 | 10,000 | | |
| HP維持費 | 10,000 | 31,940 | 148,060 |
| 通信費 | 20,000 | | |
| NL編集費 | 10,000 | | |
| NL発送費 | 10,000 | | |
| NL印刷費 | 10,000 | | |
| 紀要編集印刷 | 350,000 | 350,000 | 0 |
| 紀要発送費 | 15,000 | 0 | 15,000 |
| 研究費 | 0 | 0 | 0 |
| 大会開催費 | 60,000 | 60,000 | 0 |
| 2010年度ゲスト招聘費 | 250,000 | 250,000 | 0 |
| 予備費 | 15,436 | 0 | 15,436 |
| 計 | 870,436 | 691,940 | 178,496 |

2010年度への繰越金 (372,436-691,940) -319,504

特別会計 (選挙費用+スカラシップ)

| | |
|--------------|--------|
| 繰越金 | 68,449 |
| 09年度スカラシップ入金 | 2,000 |
| 計 | 70,449 |

◇2010年度 予算◇

| 一般会計 | | |
|------|----------|------------------|
| ＜収入＞ | | |
| | 予算 | 備考 |
| 繰越金 | -319,504 | |
| 会費収入 | 714,000 | 6,000円×140名×0.85 |
| 当該年度 | | |
| 過年度 | 120,000 | 6,000円×20名 |
| 計 | 514,496 | |

| ＜支出＞ | | |
|------------|---------|----------|
| | 予算 | 備考 |
| 会合費 | 30,000 | |
| 人件費 | 30,000 | |
| 消耗品代 | 30,000 | |
| HP作業費 | 0 | |
| HP維持費 | 0 | |
| 通信費 | 20,000 | |
| NL編集費 | 0 | |
| NL発送費 | 2,000 | 80円×25名 |
| NL印刷費 | 1,000 | |
| 10年度紀要編集印刷 | 350,000 | |
| 09年度紀要発送 | 12,000 | 80円×150名 |
| 研究費 | 0 | |
| 10年度大会開催費 | 30,000 | |
| 11年度ゲスト招聘費 | 0 | |
| 予備費 | 9,496 | |
| 計 | 514,496 | |

特別会計

| | | |
|----|--------|--------|
| 収入 | 前年度繰越金 | 70,449 |
| 支出 | 選挙費用 | 24,000 |
| 残 | | 46,449 |

イングランドにおける才能教育プログラムの取組みについて

コーシア郁実

2010年4月に、松村暢隆・石川裕之・佐野亮子・小倉正義（編）の「認知的個性：違いが活きる学びと支援」（2010年、新曜社）が出版されました。私も、イングランドの教育方法に関して書かせて頂きました。本書で定義する「認知的個性」とは、「認知発達も個性ある姿で発達するものと捉え直し、個人のもつ才能や障害も含めて個人差は、多様な認知発達のプロフィールのひとつ」であり、「才能教育や個性化教育、特別支援教育のなかで、その存在と意義を認め、見つけ、育てるべきもの」（p.2）だと考えます。日本の学校現場では、個性化教育と特別支援教育はそれぞれ研究や現場での実践が行われています。しかし、才能教育に関しては、学校現場においてそれほど普及されていないかと思えます。そこで、今回はイングランドのダラム市ダラム大学、ヨーク市ヨーク・セント・ジョン大学、そしてヨーク市の中等学校（Secondary Schools）での取組みをご紹介します。

毎年夏に、イングランドのダラム大学では「Durham Gifted and Talented Summer School」と題して、才能教育プログラム（Young, Gifted and Talented Programme）を実施しています。このプログラムは、9つの地方に住む11歳から16歳までの極めて優秀又は才能豊かな子ども達を対象とし、1週間無償で提供されるプログラムです。プログラムの内容も、刺激的・革新的・挑戦的なものであり、子ども達の学びの欲求を満たすように構成されています。その他にも、様々なソーシャル・イベントが行われ、一足先に大学生活を体験できるプログラムとなっています。チューター等のスタッフもダラム大学の学生が担うため、大学生活や授業のことなど、的確なアドバイスも得ることができ、有意義な時間を過ごすことができます。

またヨーク市では、3月頃にヨーク・セント・ジョン大学と市内の公立中等学校3校が共催して、言語的な面で優れた能力や才能があると判断された子ども達（Year9）を対象とする語学プログラム（日本語・中国語・ギリシャ語・アラビア語・フランス語・ドイツ語等のクラス）が実施されました。このプログラムの参加費用は無料であり、毎週土曜日の午前中（2時間）に、5回コース実施されました。参加費用が無料になった背景には、ヨーク・セント・ジョン大学から助成金が出されたためです。このプログラムの実施に当たり、ヨーク・セント・ジョン大学がヨーク市内の公立中等学校に声を掛け、具体的な構成や計画、講師の配置等の全ての運営を行いました。そのため、主にヨーク・セント・ジョン大学の企画とも言えます。また、今回参加した公立中等学校3校の内1校はLanguage Collegeでもあるため、各学校で選抜された子ども達はそのLanguage Collegeに集まり、種々の言語を学ぶ機会を得たわけです。たとえば、自分の学校で第2言語としてフランス語を学んでいる生徒が、このプログラム中に第3言語として日本語を学ぶという具合に、自分の興味がある言語を選択し、自

分の語学の幅を広げることが可能となりました。

このように、イングランドでは大学が主催し、近郊の中等学校と協力しながら、新たなプログラムやプロジェクトを実施することは珍しくありません。日本でも、このように大学と中学校が協力することで、才能教育・個性化教育・特別支援教育において様々な取組みを行うことができるのではないのでしょうか。それにより、今後の日本の未来を担う子ども達の様々な個性（認知的個性）を開花させ、伸長する機会を提供できるのではないかと考えます。

【参考・引用文献】

- ・ 松村暢隆・石川裕之・佐野亮子・小倉正義（編）「認知的個性：違いが活きる学びと支援」（2010年、新曜社）
- ・ <http://www.dur.ac.uk/undergraduate/schools/summer/dgtss/>



在外研究を終えて

首都大学東京研究員 岩下 誠

2010年3月をもって、およそ一年間におよぶバーミンガムでの在外研究を無事終えることができました。この場を借りて、お世話になった皆様に御礼申し上げます。

単身ではなく家族とともに海外生活を送りましたので、プライベートでも沢山の良い思い出ができましたが、ここでは主として研究面に限って、在外研究中に考えたことを振り返ってみたいと思います。

(1) 史料の問題

渡英前、とある飲み会の席でイギリス史の先生が次のようなことを仰っていました。

「文書館には史料を探しに行くんじゃないだよ。史料がない、ということを確認するために行くんだよ」。

この時は正直、その意味するところが分かりませんでした。実際に一年間現地の文書館で史料を捜しまわるといふ経験をした後では、この時の先生の言葉が何となく腑に落ちたように思います。

インターネット等を通じて、現在イギリス教育史の史料へのアクセスは以前よりも相当容易になりました。とはいえ、実際に現地に行かなければ閲覧できない未刊行の文書館史料も未だ多く、渡英当

初は「これで今まで時間やお金の関係で見られなかった史料を、思う存分に見て周ることができる」と高揚した気分で次々と文書館や図書館を訪れました。

ところが、実際に文書館に行ってみると、目当ての史料が自分が想定していた類のそれとは全く別の史料であったり、刊行史料と同じことしか書かれていなかったり、あるいはほとんど断片的な情報しか含まれていない、といった経験をするこのほうが圧倒的に多かったのです。文書館を周るという作業は、新たな史料を発見するというよりはむしろ、「これ以上の史料は今のところない」「この範囲を越えて史料を探すことはできない」ということを発見する、という経験でした。そして、このことは単に否定的な経験ではないのではないのでしょうか。自分が利用可能な史料の範囲や限界を把握できるということが、史料を使ってどのような立論が可能であるかを考えるポジティブな条件となり得るのだと思います。在外研究での史料調査の機会は、限られた日数、ピンポイントで史料を見に行く、というこれまでの史料調査とは別の経験を提供してくれたように思います。

(2) 実証とは何か

このことと関連して、在外研究期間中に改めて考えたのは実証の問題です。歴史研究である以上、可能な限り多くの史料にあたり、厳密な史料批判を前提とし、できる限り客観的な論理構築をするということはもちろんのことです。しかし、受け入れ研究者であるマルコム・ディック先生とほぼ毎月のように研究経過報告と相談を重ねていった経験から感じたのは、何が reasonable で persuasive な議論であるのかという基準は、そのすべてが予め客観的に与えられているというよりはむしろ、研究者同士のコミュニケーションから導き出されるものでもある、ということでした。一次史料が足りないと弱音を吐いていた私に対して、ディック先生は、「君が今まで検討した史料の範囲内で、persuasive な議論は十分できると思う」と励まして下さいました。この研究は2009年12月にバーミンガム大学のDOMUS Seminar という研究会で報告の機会を得ることができましたが、そこでもイアン・グロヴナー教授やルース・ワッツ名誉教授など諸先生方から有益なコメントをいただき、是非活字化するようにと励ましの言葉をいただくことができました。半分は社交辞令であるかと思いますが、研究者のコミュニティは研究を評価するだけでなく、それを創り出していく側面を持っているのだなあということに改めて感じた次第です。

これらのことは、史料批判や研究共同体の重要性といった、比較的ありふれた認識なのかもしれませんが、しかしそれを頭の中だけでなく、実際に身をもって経験するという機会を得られたことが、在外研究で得られた思いがけない成果でありました。

最後に、在外研究中に進めた研究はイギリス教育行政史研究の分野にも関わるものであり、帰国後、故大田直子先生にぜひ助言をいただきたいと思っていたものでした。残念ながら先生に読んでいただく機会は失われてしまいましたが、これらを少しでも早く活字化することで、学恩をお返しできればと考えています。僭越ながら、この小文を今は亡き大田先生に捧げたいと思います。

紀要の原稿を募集しています

ニューズレターと前後して、学会紀要『日英教育研究フォーラム』14号がお手元に届いているかと存じます。今号は、大田さんの思い出を特集しました。

次号の原稿を随時募集しています。執筆のご計画をおたていただけたらと存じます。なお、原稿は可能な限りEメール（テキストファイルまたはWord文書）でご提出ください。

紀要編集代表 広瀬裕子（専修大学）hirose@isc.senshu-u.ac.jp

【編集後記】

暑かった夏の大会から4ヶ月が過ぎました。今年は秋が短かったです。京都は紅葉のまっただ中、近年、時期が少しずつ遅くなってきているように思います。それでも、春の桜、冬の雪化粧も素晴らしいのですが、やはり、色とりどりに彩られた山々を眺めていると、京都に住んでいてよかったとしみじみ思います。

ニューズレター36号をお届けいたします。今号は34号に引き続き、コーシア郁美会員と岩下誠会員に原稿を依頼いたしました。快くお引き受けいただき、素晴らしい原稿を頂戴し、感謝しています。いつまでも、こんなことを言っているはいけないのですが、これも大田さんの遺産だと思います。

学会事務もようやく落ち着いてきました。今後とも、ご支援のほどよろしく願いいたします。

(谷川至孝)

日英教育学会 (Japan-UK Education Forum)

代表 上田 学

◆事務局 〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町 96

佛教大学教育学部・谷川至孝研究室

TEL 075-491-2141 FAX 075-493-9044

◆問い合わせ先 青木研作 aokik@nisikyu-u.ac.jp (入退会等)

谷川至孝 yoshi@bukkyo-u.ac.jp (会計等)

上田 学 ueda@kyoto-wu.ac.jp

◆郵便振替 00170 2 780381 日英教育学会

◆三井住友銀行 武蔵関支店 総合 6651815

日英教育研究フォーラム事務局長 谷川至孝